



嫌われセクハラ教師の淫行 2

小説モーメント

青葉に処女を奪われたあげく、中出しされた千音星はその夜、泣きながら懸命に体を洗った。

しかし、いくら洗ってもあの男の感触と臭いが取れない。粘り着く精液の感触が残っている感じがした。

次の日になってもまだ、その不快感があった。

登校途中に青葉に会わないことを祈りつつ、下駄箱を開けると、そこには一枚の手紙が入っていた。

手紙を見て千音星の心がざわついた。まさか昨日のように脅されて？ 不

安になりながらも、トイレへ駆け込み個室に入る。

手紙には『午後の長休みに、屋上に来い』と書かれていた。

(来なければ良かった) 千音星は後悔していた。

千音星はトイレからでると、橘瀬里奈に出会う。

「千音星ちゃん、地域ボランティアの件だけ……」

「橘先輩……」

「どうしたの？ 顔色悪そうだけど大丈夫？」

「え、あ、はい。何でもありません。チラシの事ですよね？ ちゃんと持ってきています」

「良かった、それじゃあ放課後、生徒会室で待ってるわね」

「わかりました……私もう……行きますね」

千音星はそう言う足早にその場を去った。

「あ、ちよつと千音星さん。どうしたのかしら何だか様子が……」

千音星は胸の鼓動を抑えようと深呼吸した。

そして、午後の約束の時間。千音星は屋上へ向かう。

屋上には既に青葉の姿があり、千音星を見るとニヤリと笑う。

「来たな」

「青葉先生、一体・・・何の用ですか？」

「昨日の続きだよ」

「やめて下さい。あんな事、他の生徒に見られたら・・・」

青葉は千音星の言葉を遮るように、肩を掴む。

千音星の顔に恐怖の色が浮かべた。

「俺に逆らえると思ってるのか？細田を助けたいんだろ？」

「そ、それは」

「あいつ国公立大学を目指しているんだってな。何でも家族のために医学部に入りたいとか」

「・・・」

青葉の卑劣な要求に目の前が眩みそうになる。